

南東濠洲地方の同期には *Cladophlebis*, *Thinnfeldia* は発見されざるも次の三疊紀となれば *Cladophlebis australis*, *Thinnfeldia Feistmantelii*, が *Phyllothecca robusta* や *Williamsonia* などと共に発見さる。

日本で生れた高山植物

小 泉 源 一

日本が洪積世の寒冷なりし時代に、其土地で生れた特有要素の多い事は誠に著しいことであるが、其等の内で當時西南日本の低地にあつたもので、漸次其寒冷の氣候に適應して寒地植物の仲間に入り、其後氣候暖和せし時に之等高山植物と行動を共にし、現在は東北日本の高山にあるが、又元來の子孫は矢張り西南日本の低地山地に生育し、決して高地には産しないものが若干ある。今其等を擧げて見ると、オホカメノキ、アカミノイヌツゲ、アカモノ、イハカミ、ハクサンハタザマ、イハナシ、オホバキスミレ、タニギキヤウ、ミヤマシグレ、カウリンクワ、等であるが、尙ハクサンフウロ、ミヤマズメソヒエ、イブキゼリ、オホバシヨリマ等は伊吹山より漸々降りて近畿の低山に産するのは奇である。

キヨスミヒメワラビの學名

小 泉 源 一

予は *Florae Symbolae Orientali-Asiaticae* (1930) p. 21 で、モクバ (コキンモフキノデ) の學名を *Dryopteris Maximowicziana* (MIQ.) KOIDZ. としたのは *Aspidium Maximowiczianum* MIQ. の type を見てした事で、尙念のため其 phototype と實物小片とを持歸つたことであつた、之と同時に *Aspidium subtripinnatum* MIQ. も亦モクバであることもたしかめた。

然るに是より先 1924 年 CHRISTENSEN 氏は *Aspidium Maximowiczianum* MIQ. をキヨスミヒメワラビと考へ *Dryopteris Maximowicziana* (MIQ.) C. CHR. としたのは無論 MIQUEL 氏の type を見ずにしたことで誤りである。

それでモクバの學名は予のものを採用する能はず、*Dryopteris subtripinnata* (MIQ.) O. KUNTZE を採用すべきであるが、キヨスミヒメワラビの學名は上の C. CHRISTENSEN のを採用し難く、やはり *Dryopteris Matsumurai* (MAKINO) C. CHR. である。

レヴェエー氏歐洲大戰中の仕事

小 泉 源 一